〈エムス電報事件〉

1870年

すべてはビスマルクの掌（てのひら）の上、思惑通り。

万一レオポルト公がスペイン国王にでもなろうものなら、フランスは「ホーエンツォレルン朝（ドイツ）」と「ホーエンツォレルン朝（スペイン）」に挟み撃ちにされる格好となりますから、ナポレオン３世がこれを看過できないのも当然と言えました。

「これを見過ごせば、余はフランソワ１世(＊01)になってしまう！」

しかしその一方で、ナポレオン３世は「普仏（プロイセン フランス）開戦」を望んでいませんでした。

当時のフランスは、外交的にはメキシコ問題に忙殺され、合衆国（アメリカ）と敵対し、軍事的には劣勢(＊02)で、何より彼自身が重い病に冒されており(＊03)、気力も知力も体力も衰え、とても戦場を駆け巡ることなどできなかったためです。

幸い、フランソワ１世のときとは違って、まだレオポルト公は即位はしていないのですから、その前に外交的手段で解決することも可能かもしれません。

ナポレオンは事を穏便に進めるため、国内では輿論（よろん）を煽って「開戦！」を叫ぶ主戦派（タカ）を抑えつつ、対外的には駐普（プロイセン）大使（ヴァンサン）Ｖ．ベネデッティ伯爵（Ｃ-２）に命じて普（プロイセン）王ヴィルヘルム１世の説得に走らせました（Ｃ-１）。

（＊01）ヴァロア朝 第９代 国王（1515～47年）。フランソワ１世の御世、フランスは「ハプスブルク朝（スペイン）」と「ハプスブルク朝（ドイツ）」に挟み撃ちにされ、外交的な苦境に陥ったことがあります。フランスはこの包囲態勢を打破するため、幾たびもの戦争を仕掛け、ヨーロッパは戦乱に巻き込まれていきました。

（＊02）メキシコ遠征で弱体化した上、多くの軍をメキシコ防備軍として駐留させていました。

ところで当時、ヴィルヘルム１世は休暇を取ってドイツでも有数の温泉地エムス（Ｂ-３）に保養に来ていました。

そこへベネデッティ伯爵が訪れます（Ａ-２）。

「今やフランスの輿論（よろん）は激昂し、我（ナポレオン３）が君が必死にこれを抑えていますが、

もはや抑えが効かなくなりつつあります。

両国の和平のためにも是非とも！　是非ともご善処のほどを！」（Ａ-1/2）

お人好しのヴィルヘルム１世は、ベネデッティの必死の訴えを受け、表向きは「考えておく」とだけ伝えながら、実際にはこの要請を受けて、ジグマリンゲン家に「こたびの要請は辞退するよう」通達したのでした（Ａ-2/3）。

これはビスマルクに内密のまま、王（ヴィルヘルム１）の独断で行われます。

――事の顛末（てんまつ）をあやつ（ビスマルク）に伝えれば、反対するに決まっておるからな。(＊04)

しかし、事後にそのことを知らされたビスマルクは落胆し、「国王の信任がないのならば」と辞任を考えたほど。

もしこのまま事態が落ち着いていたら、ほんとうにビスマルクは辞任してし

（＊03）このころのナポレオン３世は、永年のストレスで腎臓結石や膀胱結石を患っており、歩行すらままならず、とても乗馬して戦場を駆け巡ることなどできない状態で、息子（ルイ）への譲位を考えていたほどでした。

（＊04）当時のヴィルヘルム１世は、北ドイツを手に入れ、強国の仲間入りをしたことで満足してしまい、これ以上フランスと事を構えて、今の状況が水泡に帰すことを怖れていました。

まい、そこから先の歴史も大きく変わったことでしょう。

しかしやはり、歴史はビスマルクを必要としていたようです。

すぐに、そうした辞任の考えが吹き飛ぶ事件が起こります。

フランスでは、「受諾するはずがない！」「断ればそれが戦争口実になる！」と息巻いていたフランス主戦派が、ヴィルヘルム１世があまりにもあっけなく「辞退」を受け容れてしまったため拍子抜け。

そこで今度は、さらに「ホーエンツォレルン家の血を引く者は未来永劫にわたってスペイン国王にならない」と誓約させるよう、ナポレオンに迫ります。

病のために気力も判断力も衰えていたナポレオンはこれに応じてしまい、ふたたびベネデッティ伯爵にその旨を通達しました。

そうとは知らず、すべて事は済んだとエムスで休暇を楽しんでいたヴィルヘルム１世は、朝（７月13日）の散歩中、その先にベネデッティ伯爵の姿を認めてげんなり。

――おはよう、ベネデッティ卿。

して、今日は何用かな？

「スペイン王位の継承問題についてですが…」

――そのことについては、余がレオポルト公に辞退するよう通達したことはすでにそちも知っておろう？

まだ彼（レオポルト）から返事は来ておらぬが、今日明日にも「辞退する」との書簡が届くであろう。

それでこの件は終わりだ。これ以上、余に何をせよと申すのだ？

「今回のことはそれでよいとしても、我が君（ナポレオン3）が怖れておりますのは、第２第３の“レオポルト公”が現れることでございます。

そこで、今後「ホーエンツォレルン家の血を引く者は未来永劫スペイン国王にならない」ことを陛下ご自身の口から宣言いただき、その誓約書にサインを戴きたいのです。（C/D-1）」

これはどう贔屓（ひいき）目に見ても無礼千万な要求です。

まるで無条件降伏した敗将に対するかのごとき要求で、さしもの“お人好しヴィルヘルム”も怒りの色を隠せませんでした。

この会見の直後、レオポルト公から「辞退する」旨の書簡が届いたので、ヴィルヘルム１世は２人の側近、侍従長（Ｈ．Ｊ．Ｗ．Ｒ．アーベケン（ハインリヒ ヨハン ヴィルヘルム ルドルフ））と内相（Ｆ．Ａ．オイレンブルク伯爵（フリードリヒ アルブレヒト））と話し合い、「今しがた、レオポルト公より返事を受け取ったので、これ以上話すことはない」との返事を伝える（D-2/3）とともに、今回の一連の顛末をベルリンにいるビスマルクに打電することにします（B/C-3/4）。

エムスからこの電報が届いたのはその日の夕方でしたが、そのときビスマル

クは自邸（A-5）でローン陸相（C-5）・モルトケ参謀総長（B-5）と善後策を協議するため会食していた（B/C-4/5）ところでした。

ビスマルクがエムスからの電報（A/B-4）を読み上げると、モルトケ・ローン両名は落胆のあまり持っていたフォークを落としてしまった（C-4/5）と言います。

「これで開戦はなくなった！

摑(つか)みかけた“果実”はあっさり手をすり抜けてしまった！」

ビスマルクが東奔西走してようやくたぐり寄せた天下(ドイツ)統一のチャンスを、外交をまったく理解できないヴィルヘルム１世の独断によって台無しにされたのですから、彼らのショックたるや如何ばかりか。

しかし。

モルトケ・ローン両名が嘆く中、じっと電文を見ていたビスマルクが、ぽつっと意外な言葉を口にします。

――モルトケ。

一応確認しておくが、我が連邦軍はフランス軍と戦って確実に勝てるのだろうな？

「我が国創建以来、

我が軍がこれほど強くなったことはありませんでしたよ。（A/B-5）

いざ開戦となれば、相手が誰であろうと後(おく)れを取ることはないでしょう！」

――よろしい。ならば、開戦だ。（C/D-4）

ただちに戦争準備に入りたまえ。

きょとんとして顔を見合わすモルトケとローン（D-5）。

「いや…、そうはおっしゃいますが閣下。

その電報を読むかぎり、陛下はフランスと和解してしまっております。

もはや開戦はありますまい？」

――いや、諦めるのはまだ早いぞ。

ここに「事の次第を新聞に公表するかどうかの判断を私に委ねる」とある。

そこで私は、これを新聞に発表して開戦に持ち込もうと思う。

「されど閣下。

この電報を発表したところで戦争にはなりますまい？」

――ふむ、このまま発表すればな。

だが、ここの部分をこう省略して発表すればどうじゃ！？

モルトケとローンは眼を見開いて驚きます。

「な、なるほど！！

これなら、フランス人が読めばフランスが侮辱を受けたように読め、

ドイツ人が読めばドイツが侮辱を受けたように読めますな！

しかも、文面を改竄(かいざん)したわけでもないから嘘ではない！」

こうして、エムスからの電報は“少し省略”されて、翌日、新聞発表されました(＊05)（次幕パネル D-1 & D-5）。

しかもこの日は、よりによって「７月 14 日」。

（＊05）これを「エムス電報事件」と言います。